

## 第 7 回 応力テンソル (1)

無機材料工学科  
准教授 安田公一

### 1. 応力ベクトル

第 5 回の講義(材料力学における応力ベクトル)では、断面積一定の棒状試験片を横切る仮想断面を考えたが、実際の物体では、いつも、断面積が一定であるとは限らない。また、表面力の作用する領域や、変位拘束の領域によっては、物体内に応力ベクトルに分布が生じる。このような場合にも使えるように、応力ベクトルを再定義する。

(中略)

面積素片の片方の面を表面とし、もう一つの面を裏面としよう。そうすると、表面に立てた単位法線を  $n$  とすれば、裏面に立てた単位法線は  $-n$  になる。表面に作用する力ベクトルを  $\Delta P$  ( $=|\Delta P| \cdot m$ ,  $|\Delta P|$  は力ベクトル  $\Delta P$  の大きさ,  $m$  は力ベクトル方向の単位ベクトル, 一般には,  $m$  と  $n$  は異なる) とすれば、裏面に作用する力ベクトルは 逆向きのベクトルなので  $-\Delta P$  ( $=|\Delta P| \cdot -m$ ) となり、両者の和は 0 ベクトルとなって釣り合いの条件を満たす。この時、表面の応力ベクトル  $\sigma^n$  を

$$\sigma^n = \lim_{\Delta S \rightarrow 0} \frac{\Delta P}{\Delta S} = \frac{dP}{dS} \quad (1)$$

で定義する。すなわち、物体中の任意の点  $x$  において、適当な面を指定すれば、その面に作用する応力ベクトルを定義することができる。このように定義すれば、裏面に作用する応力ベクトル  $\sigma^{-n}$  は、

$$\sigma^{-n} = \lim_{\Delta S \rightarrow 0} \frac{-\Delta P}{\Delta S} = -\frac{dP}{dS} = -\sigma^n \quad (2)$$

となって、

$$\sigma^n + \sigma^{-n} = \sigma^n + (-\sigma^n) = 0 \quad (3)$$

自動的に釣り合いの条件も満足する。また、繰り返しになるが、図 2 に示すように、一般には、応力ベクトル  $\sigma^n$  の方向( $m$  ベクトルの方向)と面法線ベクトル  $n$  の方向は一致しないので注意すること。

(以下省略)

### 2. 応力テンソル

図 3 に示すように、表面力(面を介して作用する力)  $F_i$  や体積力(重力や遠心力のように単位体積あたりで負荷される力)  $W_j$  が作用することにより、内部応力状態にある物体  $V$  を仮定する。物体内の任意の点  $P$  を参照し、図 4 に示したような無限小四面体を

作る. 面 ABC(面積  $dS$ )に作用する応力ベクトルを $\sigma^n$ とし,  $x$  軸,  $y$  軸,  $z$  軸に垂直な面 PBC(面積  $dS_x(=v_x \cdot dS)$ ), PCA(面積  $dS_y(=v_y \cdot dS)$ ), PAB(面積  $dS_z(=v_z \cdot dS)$ )に作用する応力ベクトルを $\sigma^{-x}$ ,  $\sigma^{-y}$ ,  $\sigma^{-z}$ とすると(面法線が座標軸の負の方向を向いているので, これらを裏面の応力ベクトルとした), 無限小 4 面体の力のつりあいから, 次式が得られる.

$$\begin{aligned} \sigma^n dS + \sigma^{-x} dS_x + \sigma^{-y} dS_y + \sigma^{-z} dS_z + f dV &= 0 \\ \therefore \sigma^n dS - \sigma^x dS_x - \sigma^y dS_y - \sigma^z dS_z + f dV &= 0 \end{aligned} \quad (6)$$

ここで,  $\sigma^n$ ,  $\sigma^x$ ,  $\sigma^y$ ,  $\sigma^z$  は微小 4 面体の正の面に作用する応力ベクトル,  $f$  は体積力,  $dV$  は微小 4 面体の体積である. 微小 4 面体を限りなく小さくしていくと,  $dV$  は  $dS$  に, 比べて高位の微小量となるので, (6)式を書き換えると次式が得られる.

$$\begin{aligned} \sigma^n &= \frac{S_x}{S} \sigma^x + \frac{S_y}{S} \sigma^y + \frac{S_z}{S} \sigma^z \\ &= v_{nx} \sigma^x + v_{ny} \sigma^y + v_{nz} \sigma^z \end{aligned} \quad (7)$$

ここで,  $v_{nx}$ ,  $v_{ny}$ ,  $v_{nz}$  面 ABC の単位法線ベクトル  $n$  の方向余弦である.

次に, 応力ベクトル  $\sigma^x, \sigma^y, \sigma^z$  は,  $x$  軸,  $y$  軸,  $z$  軸に沿った基底ベクトル  $i, j, k$  を用いると, 次のように表すことができる.

$$\begin{aligned} \sigma^x &= i\sigma_{xx} + j\sigma_{xy} + k\sigma_{xz} \\ \sigma^y &= i\sigma_{yx} + j\sigma_{yy} + k\sigma_{yz} \\ \sigma^z &= i\sigma_{zx} + j\sigma_{zy} + k\sigma_{zz} \end{aligned} \quad (8)$$

式 (8) を式(7)に代入すると

$$\begin{aligned} \sigma^n &= i(v_{nx}\sigma_{xx} + v_{ny}\sigma_{yx} + v_{nz}\sigma_{zx}) \\ &\quad + j(v_{nx}\sigma_{xy} + v_{ny}\sigma_{yy} + v_{nz}\sigma_{zy}) \\ &\quad + k(v_{nx}\sigma_{xz} + v_{ny}\sigma_{yz} + v_{nz}\sigma_{zz}) \end{aligned} \quad (9)$$

この式より, 物体内の任意の点 P で適当な面  $dS$  (面法線  $n$ ) を指定すれば, そこでの応力ベクトル $\sigma^n$  は 9 個の応力テンソルの成分 $\sigma_{ij}(i,j = x,y,z)$ から代数的に計算することができるのがわかる. なお, いくつかの本では, 同じ表現を, 次のマトリックス表示で示している.

$$(\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z) = (v_x, v_y, v_z) \begin{pmatrix} \sigma_{xx} & \sigma_{xy} & \sigma_{xz} \\ \sigma_{yx} & \sigma_{yy} & \sigma_{yz} \\ \sigma_{zx} & \sigma_{zy} & \sigma_{zz} \end{pmatrix} \quad (10)$$

ここで,  $\sigma_i$  は応力ベクトル  $\sigma^n$  の成分,  $\sigma_{ij}$  は応力テンソルの成分,  $v_j$  は面法線ベクトル  $n$  の成分である.

(以下省略)